

資料紹介

吉徳資料室所蔵絵画

山 田 和 人

解 題

同書については、すでに拙稿「竹田からくり関連の絵画資料」(『国語と国文学』平成二一年一月)において、吉徳資料室所蔵の竹田からくりの「絵画」として一覽に掲出している。しかしながら、前稿ではリストを提示するにとどまっており、その詳細について述べる事ができなかった。そこで、本稿では、これを絵画として掲出した根拠について触れつつ年次推定を試み、同時に竹田からくりの資料としてどのような位置を占めるものであるのか、吟味しておきたい。

一、 からくり絵画として

本資料について、はやく紹介されたのは、鈴木一義氏であった。

同氏は『からくり人形』(学習研究社)平成六年七月のなかに、そのうちの二枚を紹介している。それ以前には、以下図録になるが、『江戸のからくり夢空間近代科学事始』(埼玉県立博物館)平成四年七月があり、それ以後、『遊びの技術からくりからサイエンス』(龍野市立歴史文化資料館)平成九年八月、『からくり夢と科学の世界細川半蔵とその時代』(高知県立歴史民俗資料館)平成一〇年七月などでも上記の資料が箇所は異なるものの、それぞれに展示されている。これらは、すべて「引札」として紹介されてきた。しかしながら、引札とするには、いくつかの点において、不自然さを感じる。

そこで、吉徳資料室で調査をする機会を得たので、本書の書誌調査を行った。その結果、次のような諸点を確認することができた。

まず、最初に、その大きさが通常の引札とは大きく異っている事実がある。すなわち、同資料は、縦二三・八センチ×横三二・〇セ

ンチであり、引札というには、サイズが小ぶりである。縦三五、六センチ×横四八、九センチくらいが一般的である。こうしたサイズのものあまり見受けられないように思う。この大きさは、半紙本の一丁分に相当する。

次に、この三枚の絵番付を詳細に検討してみると、いささか気になることが目に付く。それは、三枚ともに本紙中央に折り返しによると思われる折り目があり、一枚目の右丁が変色しており、これもとは表紙であったのではないかと推測される。おそらく、袋綴の冊子体であつたと考えられる。そこで、三枚の資料を重ね合わせてみると、左右の同じ位置に綴じ穴があり、これら三枚が、もとは袋綴の体裁の半紙本型の絵巻であつたことが確認できる。三枚に共通する中央の折目は、やはり、袋綴による折目であつた。これと同様の三枚続きの半紙本型の竹田からくりの絵巻しが早稲田大学演劇博物館に所蔵されている。

二、『家土産竹の林』との関連

『家土産竹の林』がそれである。同書は、宝暦十年頃刊の絵巻しであり、表紙は、竹田の紋が上に、その下に、「細工人竹田近江大掾藤原清宗」とあり、その左に外題と語りがあつた。すなわち、中央に「家土産竹の林 続番組」とあり、その左右に、「新ぶたいの扇子神

子は伊勢や日向のゆめ物語よいとや申馬あらいの花桶すがた女とも見へ男也けり小坊主のおどりきやうげん（左）初芝居のしらべは一挺つゝみの手の内当りはづさぬ吹矢のかねあいはなれたりけりさらしの立波また引塩にたゞみ戻すくわいらいしのからくり（右）」とある。以下、上部にからくりの絵を描き、下部に第一から第四までの演目を記す。おどり・狂言・からくりの順に記す。狂言の役人付がそれぞれに記されている。具体的には、上部の絵には、演目名も説明もないので、下部に並記されたからくりの演目名の中から該当するものをそのままに掲げる。最初は「吹矢」、第二は「傀儡師」、第三は「棒さらし」、第四は「おほこ」、最後裏表紙に「はしこ大力」が描かれている。「吹矢」は、「吹矢難波扇」「吹矢的なのは扇」「童吹矢一曲」などの演目名を持つからくりで、童人形が吹矢で扇や蠟燭の火を射きるからくりである。「傀儡師」は、「御伽傀儡師」「傀儡師當松弁慶」などと称されるからくりで、傀儡師人形が唐人人形を操り、後に傀儡師が首掛けの箱に畳み込まれて舟弁慶の場面となり、再びもともとして傀儡師となり、最後に箱から山猫が飛び出していくという大からくりである。「棒さらし」は、「秘曲棒さらし」「曲曝浪花男」なども称され、大力の人形が、童人形を持ち上げて、棒上で布晒しを演じさせるからくりである。「おほこ」は、おぼこであり、童人形が笛を吹いたり、小便をしたりする。「万

葦稚大力」に相当する。表紙の語りによれば、それだけではなく、三味線や二挺鼓を打つ、「三弦二挺鼓」、最後に力技で、持ち上げられた梯子の上で、唐子が諸芸を披露するというものである。これらは、三歳から次第に子供が成長していく過程に応じて、さまざまのからくりを連続して演じていくという大からくりであり、『竹田新からくり』（『大からくり絵し』）でも、最後の惣切りのからくりとして演じられている。本書においても同様に用いられている。

吉徳資料室所蔵のからくり絵しも、これと類似した構成であり、表紙には、右に、薩摩座の紋と竹田芝居の紋が描かれ、それぞれに「さかい町御操名代薩摩屋小平太 座元竹本折太夫」「大坂からくり細工人竹田縫之助」とあり、その左に口上がある。その意味で、一枚目の左半分の傀儡師の絵は、表紙見返しに描かれた大からくりということになる。おそらく、この時の興行の大切りの演目は、「傀儡師」であつたと読むべきであろう。そして、以下、「指南車」「浪花うかれぶね」「融大臣三日月目録」「今様高砂鼓のしらべ」とからくりが各丁の上に描かれ、下に、狂言名と役人付が記されている。

以上の検討を通して、吉徳資料室所蔵の絵画資料は、竹田からくりの半紙型の絵しと考えるとよいものと思われる。

三、年次推定

本絵しは、江戸薩摩座での竹田芝居の興行を記したものであるが、この興行がいつのものであるか検討しておきたい。

表紙に記されている「名代薩摩屋小平太、座元竹本折太夫」に注目すると、折太夫が薩摩座の座元になるのは、天明五年（一七八五）と推定されている。すなわち、『邦楽年表』には、天明七年三月初演の『東唄操文章』の上演から、竹本新太夫死去に伴い、折太夫が薩摩外記座の座本となるとあり、また、『外題年鑑』寛政版では、天明八年八月二十一日初日の『花上野誉の石碑』の項に、「此節、薩摩座豊竹新太夫死去二付、座本竹本折太夫座ト替る」とあるが、天明五年正月の顔見世番付には、「座元竹本折太夫」とあり、この年には、すでに外記座改め薩摩座の座元を折太夫が勤めていたことになる（『義太夫年表近世篇』）。「名代薩摩屋小平太、座元竹本折太夫」と併記されている資料は、天明七年三月二十五日初日の薩摩座の『東唄操文章』である。それ以後、享和一年五月初日の薩摩座『敵討操姿鏡』では、名代、座元ともに薩摩屋小平太になっている。その意味で、この絵しは、天明五年以降享和二年以前の興行ということになる。再度、表紙に注目すると、「来ル戊三月三日より」とあり、これは「戊三月三日」と考えられるので、「戊」に

あたる当該年次は、寛政二年が享和二年ということになる。おそろく、寛政二年の興行のものと思われる。

なお、三丁目のみであるが、これと同版のものが三井文庫にも所蔵されている。

本絵尽しのうち大切りに演じられたと思われる「傀儡師」と「融大臣三日月目録」は、従来より、その他の資料で知られていた演目である。それ以外の演目については、本絵尽しでしか知ることのできないものであり、竹田からくりの演技や内容についてうかがい知ることのできる貴重な資料である。

竹田芝居は、明和四年に近江大掾を受領した清一も逼塞して、まもなく近江大掾の名とともに、芝居も名代も人手に渡る。これ以後、一座は竹田縫之助を名乗って興行を続けていき、明治に至る。明和四年の江戸下りの時には、すでに、竹田縫之助となっている。『機関千種の実生』『若楓東雛形』がその時のからくり絵本である。この時は、清一から代替わりした縫之助が名代として一座を率いていることが序文から知れる。序文に描かれた舞台の口上の姿からも若干年の縫之助であったことがわかる。この時は、一座は、辰松座で興行している。

その後、安永六年（一七七七）にも江戸下りをしている。この時は結城座での興行である。その詳細はからくり絵本『竹田大唐縁』

によって、知ることができる。

それ以後の、現在確認できる竹田芝居の江戸下りの絵尽しは、吉徳資料室所蔵の本資料に記された寛政二年（一七九〇）の薩摩座での興行がもっとも新しい。番付や記録類は別にして。

もちろん、大阪での興行は、文化五年度、大坂若太夫芝居（『日本萬代礎』）、享和年間から文化年間、大坂竹田か（『身延山恵方伝記』）、文化六年か、大坂大西芝居（『四天王寺伽藍姿』）、明和四年閏九月、京都四条北芝居（『銘菊艶』）、安永三年四月から八月、京都（『竹田大からくり』）、安永年間から寛政年間、大坂竹田か（『新からくり人形づ』他）などの絵尽しから、その興行の実情をつかがうことができる。いずれにせよ、本資料は、竹田芝居の寛政年間の江戸下りの実際を知ることのできる貴重な資料である。

おそろく、竹田芝居は、江戸下りを重ねることで、経済的な困窮をなんとか賄おうとしてきたのではないかと推定される。文化・文政年間の事情もおそらくそれほど大きな開きがあるものではなかったと考えられる。

最後に、本資料の紹介を御快諾いただいた吉徳資料室に感謝申し上げます。

翻刻

来ル戊月三日より はんもとさかい町（紋）中嶋屋正

紋 さかい町 御操ノ名代薩摩屋小平太ノ座元竹本折太夫

紋 大坂 からくり細工人ノ竹田縫之助

乍憚ノ口上 一御町中様益御機嫌能被遊御座恐悦至極ニ奉存候

然ハ先年罷下リ御ひいき厚ク被成下候竹田縫之助此度罷下リ古

古采之からくりニ珍敷新からくり取組并子供きやうけん仕奉入

御覽ニ候間御鼻肩相からず初日より永当くと賑々敷御見物

ニ御入被下候様偏ニ奉希候已上

月日

(一才)

〔傀儡師の図〕(一ウ)

指南車しんなんぐるま

最初車の内の人形南をゆびざし いろくはたらき後とけいと

成ル

車はぶたひをしさいにまはる そらよりはつきほしいづるから

くり

(上段)

有職鎌倉山

一由解新左衛門

竹田升蔵

一熊田軍八

竹田七蔵

一郡司兵衛

竹田藤蔵

一あじろき

竹田熊蔵

一小はる

竹田亀蔵

一初しも

竹田今吉

一天一方

竹田虎蔵

一秋田城之助

竹田音蔵

一源左衛門はは

竹田八重蔵

一忍ひ大和

竹田新蔵

一左野源藤太

竹田鶴蔵

一はきのひ

竹田太之吉

一玉ざしたまざし

竹田崎之助

一舟橋勇助

竹田門蔵(下段)(二才)

浪花つかねなばな

最初船頭の人形かいをさしふねをぶたいへおし出す 中にてぎ

をんばやしある 内より太夫の人形出うをつり上る 大じんの

人形たばこをのむ かぶろの人形花火をたく 又法師出三みせ

んをひく たいこもちいでさまく身ぶりしておどる のちし

やうしをしむればさまくのかけあうつるからくり(上段)

一佐野源左衛門

竹田音蔵

一小性

竹田今吉

一 いを平 竹田新蔵

一 北条時より 竹田熊蔵

一 ゆけ大助 竹田鶴蔵

一 別当 竹田藤蔵

一 こしち 竹田太之吉

一 三浦やすむら 竹田とら蔵

一 与五作女房おとわ 竹田崎之助

一 近習侍 竹田七蔵

一 原田六郎 竹田升蔵

一 大工与五作 竹田門蔵

一 どくあん 竹田鶴蔵

一 むねたか公 竹田太之吉

一 勇介女房おそて 竹田八重蔵

一 三浦荒次郎 竹田虎蔵(下段)(二ウ)

融大臣三日月目録ゆきのおおとみかみつきめくろく

最初まへなる水ふねの中をあらため水を入おく 初あまの人形
はしほをくむはたらきありて 後あまの人形はとをるのおと
のすがたとなりていろくはたらきある 後もみちのゑだより
にちのかけはしさがる おとゞ人形は月とけし かけばし二ウ
つりそらへのぼる 三日月あらわるゝそのかたちつりばりとな

る

三日月ゆみとなる 矢をはなせはこなたの枝よりとりあまたと
びさる 其後三日月ふねとなる 中よりうさぎあらはれ ほを
あけそらよりぶたひへうつりはしり入ル 水ふね中にうをおゝ
くわきいづるからくり たんくくと月はまんげつと成からくり

(上段)

一 荒木げんば 竹田七蔵

一 宮つこ 竹田今吉

一 梅太郎 竹田亀蔵

一 まきゝぬ 竹田熊蔵

一 初しも 竹田今吉

一 金子氏 竹田新蔵

一 月さよ姫 竹田崎之助

渡染錦帯橋 竹田熊蔵

一 くつわやがん助 竹田熊蔵

一 ちよくし 竹田鶴蔵

一 長門之助 竹田七蔵

一 大地よし高 竹田門蔵

一 芳川くらんど 竹田音蔵

一 すへぜんきやう 竹田升蔵

一 けいせい高まと 竹田八重蔵（下段）（三才）

今様高砂鼓たかすなづちのしらへ

最初両方のやたいの中をあらため大小のつゞみを双方へ入おけ
ばしぜんとつゞみなりいだす それより高砂のうたいにあわせ

つゞみなる さてしやうとうは人形いろくはたらきありての
ち ふたつのにんきやうはすみよしおとりとなる かさをもち

さまく身ぶりしておとる 扱それよりまつのゑだ左右へさが
りてつゞみの入たるたいこをそらへつり上るれとも中にてつゞ

みなる也 それより又中へかねとたいこを入かへる同しくそら
にてかねたいこなりいだす

又松の枝より住吉大明神のがくあらはるゝ 又やたい二人たる
かねたいこは白さきとかわる飛とさるからくり（上段）

下屋舗の段

一 奴どて八 竹田新蔵

一 同やく内 竹田藤蔵

一 同かん助 竹田鶴蔵

一 同へく平 竹田七蔵

一 こしもとなる 竹田熊蔵

一 同ちゑた 竹田太之吉

一 蔵人女房やとりき 竹田崎之助

一 奴もじ助 竹田門蔵

一 さどふ 竹田龜蔵

一 すへ五郎 竹田虎蔵

頭取 竹田金蔵

千種萬歳樂大叶

さかい丁中嶋や伊左衛門板（下段）（三ウ）